# インドでの出会い

## １　この研修プログラム全体について

私がこの文化学部の国際文化研修について知ったのは、1 回生の比較文化概論という授業の中で矢野先生がインドについての講義をされた回のことでした。その日の講義では、インドの文化や宗教などについて学ぶと同時に 2012 年度に国際文化研修として実際にインドの大学へ行かれた先輩方の映像や写真を見せていただきました。私はそれを見て２回生になったらこれに参加してみたいと思いました。そしてインドという国に興味を持つようになりました。今まで私の中でインドと言ったら「カレーの国」というイメージがあるくらいでインドの文化や宗教、言語や教育また、衣食住や習慣などについてもほとんど無知でした。しかし、だからこそ未知なる土地で現地の人々と交流している先輩方の姿を見て非常に興味がわき、この国際文化研修を通してインドについてもっと知りたいと感じました。また、それと同時に今、何気なく、当たり前のように生活している日本での暮らしを見つめなおす良いきっかけにもなると思い応募することに決めました。費用のことや安全面などについても家族の理解も得ることが出来、快く承諾してくれたことには本当に感謝しています。しかし、実際にインドへ行くことが出来ると決まってから様々な不安を抱くようになりました。事前学習で初めて習ったヒンディー語の難しさにはとても困惑しましたし、これが私にとって初めての海外への旅であるということもあり、パスポートやビザを取得する手続きなども一苦労でした。しかし、そのような大変であったことは忘れてしまうぐらいインドでの２週間はすべてが新しく毎日とても充実していて本当に楽しく、私にとってかけがえのない大切なものになりました。

## ２　授業について

### (1) ヨーガ

まず、ヨーガについて話そうと思います。私はもともと母がヨーガを習っていたこともありヨーガにとても興味がありました。自分で本を見ながらやっていたこともあったので、この研修で毎朝本場のヨーガのレッスンが受けることが出来るのをとても楽しみにしていました。

大学の歓迎パーティーで自己紹介の時にヨーガに興味があるということも言いました。すると、嬉しいことにヨーガの先生がそれを覚えていてくださり毎朝先生の目の前でレッスンを受けることが出来ました。先生は毎日のヨーガの中で何度も何度も「See your breathing.」「Observe your breathing.」と繰り返していて、それがとても印象に残っています。ヨーガでは呼吸が非常に重要であることはもちろんよく知っていましたが、自

分の呼吸を見つめる、観察するという表現にそして呼吸法の豊富さや効果が異なるということにはとても驚きました。さらにヨーガの奥深さに気付き興味が深まったように思います。動きもハードな動きは少なく、気持ちよく行えるものばかりでした。日本で暮らしているとヨーガをする習慣もなく、毎朝バタバタとしてしまいがちですが少しだけ早起きしてヨーガをすることで朝食もおいしくいただくことが出来、気持ちのいい一日のスタートを切ることが出来ました。先生がヨーガは単なるストレッチではないとおっしゃっていましたが、本当にそうだと思います。ヨーガをすることで、心が落ち着いたり集中力がたかまったりするということを実感することが出来ました。たった 9 回のレッスンでしたが本当に貴重な体験をすることが出来てとても幸せでした。

(2) ヒンディー語

次にヒンディー語の授業についてです。私は事前学習のころからヒンディー語の授業についてとても不安を抱いていました。大学でも英語以外の外国語科目を受講していなかったこともあり、全く知らない言語の授業についていけるのか心配だったのです。しかし、ヒンディー語の先生方はとても親切で面白い授業をしてくださったので心から楽しんで授業に参加することが出来ました。ヒンディー語の文字は初め、暗号のようで書き方もわからず、先生の書くスピードについていけなかったです。発音も難しく、上手く出来ないので授業で当たるたびにドキドキしていました。しかし、片言ではありますが日本語も交えながら一生懸命私たちを指導してくださる先生方の姿を見て、「私もこの熱意に応えたい！」と強く思い、宿舎に戻ってからも部屋のみんなと協力して宿題をしたり、授業で習ったフレーズを復習したり、持参していた指さし会話帳を使ったりして自分なりに授業についていこうと努力しました。本当に短い期間であったため、簡単なあいさつや短い自己紹介の文章程度しか習得することは出来ませんでしたが、それでも私たちがヒンディー語をであいさつをしたり話しかけたりすると、先生方や向こうの学生の方はとても喜んでくださり私もすごくうれしい気持ちになりました。私がインドの方が日本語を話してくれたり、日本のことについて知っていてくれたりするととても嬉しいです。それと同じようにインドの人と交流するうえで、その土地で話されているヒンディー語で会話することはとても大切なことであると思います。だから、少しだけですがヒンディー語に触れ、会話することが出来てよかったです。またそれと同時に、もう少し前からヒンディー語を学ぶ楽しさに気付いていればもっと先生方や学生のみんなとも交流することが出来たのではないかと少し後悔もしました。見慣れない、聞きなれない言語に戸惑いますが外国を訪れるとき、そこで話されている言語について学ぶことの大切さというものを改めてヒンディー語の授業を通して考えさせられました。

(3) 英語

次は英語の授業についてです。私の英語の授業を受けた最初の正直な感想は、「どうして、こんなに簡単なことばかりするのだろう？」というものでした。日本の大学生は全く英語を学んでいないと思われているのではないかと思ったのです。というのも、授業や宿題で出された問題には「ふさわしい冠詞を a、an、the の中から選びなさい」というような中学生が解くレベルのものがほとんどだったのです。中学生から 7 年以上英語を学んできているのに、そこまで知らないわけではないと正直腹が立ちました。しかし、矢野先生が「日本人は分かっていても発言しないから、分かっていないと勘違いされて馬鹿にされるのだ。」とおっしゃるのを聞き納得しました。私は英語を学ぶことが好きなので、分かった問題は出来るだけ積極的に発言しようと努力していたつもりです。しかし自信がないときは下を向いてしまうし、「私ばかりが発言するのは恥ずかしいから。」と遠慮してしまうときもありました。私だけでなく多くの日本の学生はそうだと思います。いくら問題が簡単でみんなノートやプリントにはすぐに正解を書いていたとしても、出来ているということを発言して伝えなければインドの方には私たちが理解していないと思われてしまうのです。日本での授業では発見できないような日本人の悪い癖のようなものをインドでの英語の授業で改めて気づくことが出来たと思います。

授業の後半は語彙や文法だけでなく、ゲームや発表などコミュニケーションが中心的なものでした。これは、私たちが眠たくならないように先生方が工夫してくれたもので、手作りのゲームのお題の書かれたカードなどを見ると優しさや愛情を感じました。一分間スピーチでは、自分の英語力の乏しさを痛感しました。日本語では伝えたいことが次々と頭に浮かぶのですが、それにふさわしい表現が思いつかず、文構造を考える余裕がなくなりちぐはぐな文章になってしまうのです。一分間を有効に話すことが出来ず、伝えたいことの半分も話せない悔しい気持ちを味わいました。ここで味わった悔しさやもどかしい気持ちを忘れずに、今後の英語学習を頑張るためのバネにしたいと思います。インドで英語を学んだからこそ見えたものがたくさんありました。

これは、英語の授業とは直接関係はないのですが、放課後予定ではクリケットやショッピングを行う予定だったのですが雨天のため室内でボードゲームや卓球をすることになった日のことです。私がボードゲームを観戦していると、英語の授業を担当していただいていた Tanvi 先生が「立っていないでこちらにおいで」と隣に呼んでくださり、30 分ほど二人でお話しする機会がありました。最初は何を話して良いかわからず、緊張していましたが私の決して流暢ではない英語でもだんだんと会話が続くようになり、非常に楽しい時間を過ごすことが出来ました。授業中には話すことが出来ないようなプライベートな話もた

くさんすることが出来たので本当に良い経験が出来たと思います。Tanvi 先生は日本語を話すことも聞くことも全く出来ません。そしてインドで話される英語には独特の癖というかなまりのようなものがあるため、聞き取ることも相手に伝えることも難しかったです。しかし、辞書や本を使ったりジェスチャーを使ったりしながら自分のことや日本の国のことについて紹介することが出来､また Tanvi 先生やインドについても知ることが出来ました。先生が英語の先生を目指したきっかけや結婚観、日本食や日本とインドの大学生についてなど貴重なお話が出来てとても幸せで、今でも忘れられない思い出です。

(4) 経済・経営

次にインド経済の授業についてです。私は正直「経営」や「経済」といった分野への関心があまりなく、知識もほとんどなかったので難しい内容だったら理解できないだろうなと思っていました。しかし、インドビジネスについてレクチャーしてくださった Dr.Murthy さんは話し方がとてもお上手で、面白く、知識のない私が聞いていてもとても楽しく飽きないものでした。スライドでは私たちを考慮して日本語の訳をつけてくださっていたのもありがたかったです。話の中で印象的だったのが日本とアメリカの発展の仕方の比較です。両国の特徴を比較することで責任の取り方、雇用制度、意思決定方法などの違いが浮き彫りになりわかり易かったです。インド経済の歴史や発展についての話だけでなく、インドという国の視点から日本やアメリカの経済の発展などについても考えることが出来て面白かったです。また、”KAIZEN“(改善) という日本語が世界で通じるということにも驚きました。英語の improve とは少し異なり、現状維持しつつ、規律を守り、継続的にゆっくりと変化させるという意味があるようです。今回の授業をきっかけに日本だけでなく様々な国の経済の歴史についても少し関心を持ってみたいと思います。

3　文化交流プログラムについて

次に文化交流プログラムについてです。私はこの海外研修を通して放課後に行われた文化研修が最もインドの学生の方と身近に接し、交流することが出来たと思います。学部や学年を超えて多くの人と出会うことが出来、あらゆるインドの文化にも触れることが出来ました。

一日目の art　college では学内のさまざまな施設を見せていただきました。中でも印象的だったのは図書館で多くの本が大切に保管されていました。

二日目の polytechnic　college ではインドの伝統的なダンスや楽器を使った演奏、合奏などを見せてくれました。素敵な民族衣装でのダンスは迫力ある素晴らしいもので私たち

は手拍子をしたり写真を撮ったりして楽しんでいました。すると、後半には「みんなも一緒に踊ろう！」と誘ってくださったので私たちも加わることになりました。初めは恥ずかしく、踊り方もわからないので戸惑い立っているだけでしたが、一生懸命見本を見せてジェスチャーで教えてくれたので最後にはみんなで踊りを楽しむことが出来ました。言葉や文化の壁を越えてインドの学生と日本の学生がみんな笑顔で同じ曲に合わせて飛んだり跳ねたり回ったりしながら楽しみを共有することが出来た瞬間だったと思います。インドの文化を体中で体験することが出来、時間を忘れるぐらい楽しいひと時でした。

三日目の law　college での思い出は何と言ってもメヘンディーをしてもらったことです。下書きや見本などは一切無いにもかかわらず、精巧で繊細なデザインが次々と私たちの手や腕に描かれていくのを見て、本当に感動しました。ひとりひとりデザインやモチーフが異なり、個性あふれるメヘンディーはどれも素晴らしいインド文化の１つであると思います。迷い無い線の動きで次々と描き出される世界からはメヘンディーをしてくれた彼女たちの頭の中にはもう、完成図が出来上がっているようにも感じられました。そして、この日私がもう一つ嬉しかったことが、私の手にメヘンディーをしてくれた学生さんと友達になれたということです。彼女は後日、メヘンディーをするときも来てくれたのですが、その時私のことを覚えていてくれて「Mizuki！！！」と駆け寄ってきてくれ一番に描いてくれました。彼女は私のことをご家族にも話してくれたようで、ソーラン節を一緒に見に来てくれた弟や妹も私の名前を呼んでくれ、お話して仲良くなることが出来ました。国境を越えて出来た友達は私にとって宝物です。これからも彼女とのつながりを大切にしたいと思っています。

四日目の science　college では実際に使われている実験室を見学したり、実験道具を見せていただいたりしました。中には理科の実験で使ったような器具もあり懐かしい感じがしました。また、学生さんの手描きの壺のプレゼントもありました。色やデザインは一つ一つ違いましたがどれもかわいくて、何よりも手描きの温かさが伝わってきました。
この文化交流のプログラムを通して多くの人と関わり、様々なインド文化にも触れることが出来ました。また、どの学部でも快くそして盛大に私たちをもてなしていただき、インドのホスピタリティーを強く感じ感謝の気持ちでいっぱいです。

4　遠足について

(1) ムンバイ

ムンバイへの旅で印象的だったのは、やはりインド門です。私たちはこの遠足までは学校と宿舎の往復がほとんどで、お店も宿舎から歩いていける小さな店しか行ったことがありませんでした。そのため、インド門に来た時初めて「観光地に来た。」という感じがしま

した。観光客の中には欧米から来たであろう白人や、アジアの人々もいましたが多くはインド人であったように思います。壮大で立派なインド門とアラビア海が広がる景色はとても美しかったです。

ムンバイの街や駅は本当に都会という感じで、人通りも交通量も多く屋台も軒を連ね活気にあふれていました。SUBWAY や McDonald などのチェーン店もあり、街並みも美しくきれいな建物もたくさんありました。中でも美術館などは特に素敵でした。訪れたハンドメイドのお店にはインドの伝統的な家具や食器、布やアクセサリー、ガネーシャの置物などがたくさん売られていて、どれもとてもかわいかったです。

(2) Karla Caves

インドの仏教遺跡である Karla　Caves はとても神秘的でした。すごく標高の高いところにあり、山をどんどん登っていくのですが周りには観光客などは見当たらずインドの方が多かったのが印象的でした。洞窟の中は本当に見たことがないような世界が広がっているという感じでした。説明などがヒンディー語で書かれていたのであまり理解することは出来なかったのですが、インドでこのような歴史ある遺跡を訪れることが出来、よかったです。山の上から見下ろした景色も素晴らしかったです。山を登っていく途中には何軒か屋台のようなものもあり、花や木の実で作った飾りのようなものや登山客のための休憩所のようなところもありインドの方々でにぎわっていました。

5　ボランティアについて

この研修中、学校の時間だけでなく放課後や休日まで私たちに付きっきりでサポートしてくれたのはボランティアの学生たちでした。初め、ボランティアの学生と出会ったときは正直驚きの連続でした。まずは言語です。今回のボランティアの中に日本語のできる学生はおらず、英語での会話がほとんどだったのですが、なかなか通じないのです。私の発音の悪さもあるのですがインドで話される英語には少し癖があり最初は戸惑いました。また、当たり前ですが学生同士の会話はヒンディー語なので彼らが何を話しているのか、私たちの言ったことはきちんと伝わったかなどいろいろと不安もありました。そして何よりもボランティア学生の責任感の強さ、私たちへの気遣いには何度も驚く場面がありました。食事のときは私たちが大体食べ終わるまで自分たちは食べずに「辛くないか？」「お口に合うか？」「おかわりはいるか？」など毎食気にかけてくれました。校内をめぐるときも、荷物を見ていてくれたり買い物では価格がふさわしいものかチェックしてくれたりもしました。本当に何から何までサポートしてくれたと思います。そして一番驚いたのは、彼らは特に日本に関心があるわけではなく、ただ善意でこの 2 週間私たちが快適に生活できるよう尽力してくれたということです。個人的にボランティアの Ruta と仲良くなったのですが、

彼女は本当に面倒見がよく、何度も助けてもらいました。彼らのホスピタリティーの精神や自分に任された仕事を成し遂げようという責任感の強さは素晴らしいものだと感じました。

6　その他（とくに来年度の参加者にとって参考になること、プログラムの改善など）

この研修を振り返り、私なりに改善した方がよいと思った点を最後に述べようと思います。まずはスケジュールについてです。事前学習では、昨年の日程を見るばかりでしたが可能であれば実際にいく年の日程をもう少し把握できた方がいいと思います。先生は「スケジュールには融通が利く」とおっしゃっていましたがインドが初めての私たちにとってスケジュールの融通さよりも正確さの方が大事だと思います。プリントとの変更が多かったので非常に戸惑いました。また、ムンバイでの買い物をすごく楽しみにしていた私にとって、理由もよくわからないまま買い物は中止だと言われた時は本当にショックでした。先生が体調不良のため同行されなかったので仕方がなかったのかもしれませんが、今後スケジュールを作る際には今年の反省を生かしていただきたいと思いました。次はボランティアに関して、お世話になり感謝していることは事実ですが私たちに対して過保護すぎるのではないかと思います。食事中や校舎内だけの移動のときなども私たちに付きっきりで、ほんの少しの移動やほかの学生との交流も注意を受けました。私たちに対する配慮はありがたいのですが、本音を言うともう少し自由な時間もほしかったです。また、大学には日本に興味のある生徒や日本語の勉強をしている学生もいるので、せっかくならそのような人がボランティアをした方がお互い良いのでは、とも感じました。折り紙や日本のものをプレゼントしても日本のことに興味のないボランティアの学生の反応はあんまりだったように思います。

ここには書ききることが出来ないほど、まだまだたくさんの思い出があります。ガネーシャ祭りやアーユルヴェーダの病院、ガンジーの家そしてボーイさんとの暮らしなどなど私にとって初めてのことばかりで、驚きと発見、喜びや戸惑い、いろいろな感情が詰まった本当に濃厚な 2 週間でした。インドの人々の温かさ、刺激的な暮らし、スパイシーな香りや街にあふれる動物たちの香り、響き渡るクラクションの音、立ち並ぶ店、、、すべて体中でインドを感じることが出来ました。この 2 週間で感じたいろいろなことこれからの生活でも生かしていきたいと思います。私にとって忘れられない二十歳の夏休みを過ごすことが出来て幸せです。この旅に参加できたこと、無事に 2 週間過ごすことが出来たことに感謝し、この旅での出会いをこれからもずっと大切にしていこうと思います。